

そうして雇われ提督と  
秘書官初霜は逃亡しま  
した。

ぽかぽか

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

### 提督の場合

「HEY、提督～！一緒にTeatimeしましようよ～」

「お前が紅茶に変な薬もらなきややつてやるよ、金剛」

「そうですよ、金剛さん。提督は紅茶より緑茶の方が好きなんです。はい、提督。お茶で  
す」

「全く話聞いてないな鳳翔。そしてこのお茶、絶対なんかいれてるだろ？虹色に輝いて  
るし、甘つたるい臭いがする」

「帰投したぞ提督！さあ、勝利の褒美として私と熱い一夜をすぐそうでは無いか！」

「黙りなさい長門。それはMVPの私がすることよ」

「長門、加賀……頼むから一回病院に行つてくれ」

「あの～提督～……なんか体が火照つて来ちやつて……」

「……え？ 貴方は私の依頼主で男ですよね？ 何を狂つた事いってるんですか？」

「愛ゆえに仕方がない事なんです！ そして私は男じやない！ 男の‘娘’です!!」

「…………逃げよ」

### 初霜の場合

「ふわあ～、よく寝たわ……つて！ 北上さん！ 大井さん！ なんで私の布団の中にいるんですか！？ それも下着姿で!!」

「ん～……あー、初霜様。おはようございます」

「え？ なんで様づけ？ それにその恍惚とした表情、怖いんですけど北上さん？」

「昨日は激しかつたですね、初霜様♪」

「激しかつた！？ 何を言つてるの大井さん??？」

「どうした初霜？」

「あ～、天龍さん。良いところにこの二人をど「おい！ 何抜け駆けしてるんだよ北上、大井！ 添い寝は今日の晚からくじ引きで決めるんじゃなかつたのかよ!!」 ……こ～に

いてはダメだわ。逃げましよう」

そうして提督と初霜は逃げることにしました。

◆◇◆◇◆◇

分かりやすい恋愛図

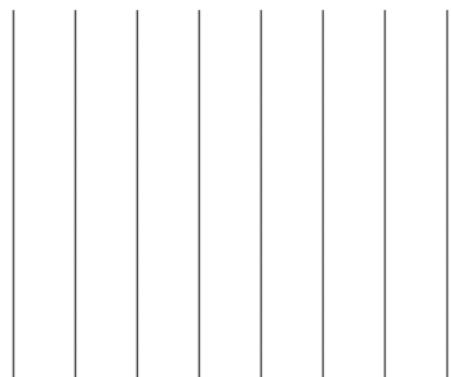
提督↑空母、戦艦組の艦娘

初霜↑その他全部の艦娘

◆◇◆◇◆◇

主にギャグメインで行きたいです。

第8話 第7話 第6話 第5話 第4話 第3話 第2話 第1話



34 27 23 19 14 10 6 1

目

次



# 第1話

——マルヨンサンマル。つまりは午前四時三十分。

深海淵艦が蔓延（はびこ）るある海域の近く、日が登り始め海を隠していた霧が徐々に晴れていく。

するとその霧の中から一隻の小さな漁船がゆっくりと姿を現した。

だが、奇妙な事にその漁船の操舵席には誰もいない。それどころか、乗組員の姿さえ見えない。あるのは船の中央に設置されている謎の黒いゴムボート。

「…………おい、初霜。大丈夫そうか？」

不意にそのゴムボートの下から若い男の声がした。

「…………分かりません。少し確認してきます」

その男の声に反応して、同じ場所から今度は幼い子供の声。するとゴムボートの下から何かが這い出てきた。

這い出てきた何かは長い黒髪を先端に縛り、桃色のくりくりとした瞳を持つ小さな女の子。服装は紺のブレザーにプリーツスカート、白のカツターシャツと赤いネクタイを着ており、足には黒いハイソックスを穿いていた。

彼女の名前は初春型四番艦、駆逐艦娘 初霜。深海淒艦を倒すために作られた艦娘という兵器である。だが、今の彼女は深海淒艦よりもっと怖いものから逃げていた。それゆえに艦装と呼ばれる対深海淒艦用の装備は持つてきていはない。その怖いものには武器などは一切効かないからだ。

「……静かに……静かに……」

自分に暗示をかけるような言葉を呟きながら、ゆっくりと這い出た初霜はそのまま台所に潜む黒き悪魔のようなカサカサとした動きで船首にたどり着き、周りを見渡す。いない。充分に見渡した初霜はほつと一安心した。そうして、ゴムボートの下に潜つているもう一人に声をかけた。

「霧がまだ少しありますが、見える範囲にはいませんよ、提督」

「よし、なら第三段階へ移行だ」

するとゴムボートがふわりと浮く。その下には黒いダイバースーツを着た長身の謎の男性がゴムボートを持ち上げていた。

端から見れば只の変質者にしか見えないが、初霜はそんな事を一切気にせずに周辺の監視を続けていた。

謎の人物はゴムボートを海面に浮かせて、その上に飛び乗る。それに続いて初霜も周りを気にしながらも、同じように乗る。

「さて、行くか」

「はい、提督」

ゴムボートの後方に搭載されていた大型の電気モーターを動かす。目指すは此処から少し遠く離れた小島。そこに着けば彼女ら二人の大脱出劇は成功に終わるのだ。

◆◇◆◇◆◇

だが、そう簡単には成功しないのがお約束なのである。

「…………くそつ予定してたより早いな」

漁船から離れて約一時間。後ろを警戒していたダイバースーツの男性が何かを感じ取つたのかそう呟いた。それを聞いた初霜の顔が青ざめる。

「だだだ、大丈夫なんでしょうか!？」

「分からん。でも海の感じからして追つては来ていない。ただ、あの漁船は見つかってるだろうな」

「ひ、ひいいい！」

怯える初霜。だが、男性はどこか傍観したような感じでただただ海を見つめていた。

「て、提督は怖くないんですか？私たち、もし見つかったら間違いなく戻されるんですよ？」

「分かつてるし、俺も充分に怖い。だが、もうここまで来たんだ。もう自分の運にかける

しかない」

「ううう……確かにそうですけど……っ！ 提督！」

初霜が前方の異変を感じとり男性に向かつて叫ぶ。深海淵艦か！と言つて慌ててモーターを止める男性。すると二人の位置より百メートル程離れた海面が、突如競り上がつていた。

「て、提督う……」

深海淵艦と思つていた初霜は情けない声で嘆く。しかし男性はニヤリと笑つた。

そんな二人が眺めている中、競りあがつて来た何かがその姿を見せる。黒いメタリックなボディに魚雷のような形をした巨大な艦。深海淵艦ではなく、それは潜水艦と呼ばれる人類の兵器の一つであつた。

「二人ともく、大丈夫でちかく？」

その潜水艦の先端に立つて二人にそんな声をかけている一人の艦娘。

スクール水着の上にセーラー服の上着のみという服装、栗色のショートヘアで頭に桜の花びらを模した飾りつきのかチューシャを着けていた。

巡潜乙型改二 三番艦 伊号第五八潜水艦娘‘伊58’。それが彼女と潜水艦の名前であり、二人の数少ない仲間であつた。

「た、助かった！」

二人は緊張の糸が切れて安心したのか、そんな声を上げた。

「今からそつちいくでちく」

伊58はそう言つて微速で二人の下へと近づく。こうして初霜と男性の鎮守府大脱出作戦はなんとか成功したのであつた。

## 第2話



無事に潜水艦の中に乗り込む事が出来た二人は小さな客室のような部屋で、のんびりと伊58に出されたお茶を飲んでいた。因みに伊58も二人と向かい合つてお茶を飲んでいる。

「はあ、こんなに平和にお茶が飲めるのはいつぶりでしようか？」

「確かあの新海域以来だろうな。ああ、茶が上手い」

「そうですね。あつ、そう言えば提督。その似合つてないダイバースーツはもう脱いでもいいんじやないですか？」

「おつ、そうだな。忘れてた。んじや着替えてくるわ」

男性は初霜の言葉に同意して部屋を退出して、すぐに戻ってきた。その姿は変質者から一変、白い軍服に身を包んだ褐色肌の若きの将校へと変わっていた。

「やっぱりその姿の方が良いです  
「でち」

「おう、ありがとうな」

ボサボサの髪を右手で搔きながら人懐っこい笑みを二人に向けて男性は初霜の隣に腰を下ろす。

「それで、結局どうして帰つてこれなかつたんぢか？」

二人の空っぽになつた湯飲みに新しいお茶を注ぎながら伊58は訊ねた。その間に二人は口笛を吹きながら目を泳がせる。

その明らかにおかしい反応に伊58はまたか、と溜め息を吐いた。

「また男氣を魅せたんぢな」

「……しようがないだろ。新海域で第一艦隊が敵に囲まれてヤバかつたんだから……」

「……それに六隻中五隻が大破してたんですよ。なら私達が頑張るしか無いぢやない

……」

「……で、その勇氣溢れる行動の結果、鎮守府中の艦娘に好かれて監禁まがいな事をされていたんぢな」

「艦娘だけじやないぞ。雇い主のあちらの提督にもだ」

「毎日毎日、執務室に呼びだされては念仏のように残つてくれないかと頼まれたわ……」

「重症でちね」

そこまで話して二人はまた茶を啜る。その姿はまるで幾重の戦場を駆け抜け疲れ果てた老兵のようだと伊58は思つた。

「……もうあそこの鎮守府の仕事は受けないようにしよう……」

「……次は本当に監禁されそうで怖いわ……」

「それだけ愛されている証拠でち」

「そんな重い愛はいらぬ」「そんな重い愛はいらぬわ」

「まあ、そうなるでちな。さて、二人はもう休んだ方がいいでちよ。特に鈴（すず）提督は着いたらすぐに書類の山が待ってるでち。それに初霜はすぐに別の鎮守府で補給船の護衛任務でち」

その言葉に初霜の隣に座っていた男性、鈴提督はまるで石のように固まり、初霜は顔を青ざめた。

「仕事が出来る二人がない間、厄介な仕事が溜まりにたまつたんでもち。それを消化させるためにも、二人には休む暇はないでち」

「嘘…………だろ…………？」

「嘘じやないでち。これを見るでち」

そう言つて伊58はセーラー服の上着の内ポケットから一枚の紙を取り出し、鈴提督に差し出す。恐る恐るその紙を受け取り目を通していく鈴提督。そしてみるみる内に体が石化していった。

「人気者は大変でちね」

伊58の言葉に二人はやつぱり監禁されてた方が良かつたかもしない……と考え直すのであつた。



### 第3話

濃霧海域（のうむかいいき）。

その海域は深海漁船さえも近づく事が許されない程の濃い霧が年中発生している未だ未解明な場所が多い海域である。

そんな海域から程近い場所に小さな孤島がある。濃霧海域に近い場所にある事から濃霧島と呼ばれるその島に【民間鎮守府】はある。

見た目は年期のある平屋のような鎮守府の居間で現在、ある死闘が繰り広げられていた。

「落ち着いてくださいゴーヤさん！」

「落ち着いているでち、初霜。だからその手を話すでち。私は島提督にちょっとお仕置きをするだけでち」

「落ち着いてないだろ!? つーか、お仕置きつて、その酸素魚雷で何するつもりだ！」

「そんなの決まってるでち…………ぶちこんでねじりこんで……開発するのでち!!」

「ふおおお!! 初霜さん、鈴！ 賴むからゴーヤを離さないでくれよお！」

「うるさい！ 誰のせいでこうなったんだ!!」

「島提督は速く逃げてください!!」

「いや、それは出来ない! 何故なら逃げれば俺への被害が倍増するからだ!」

「なら、手伝つてください!」

「怖いから無理ぼ」

「やくたたず!」

「ふふふ、今日も楽しいね」

ゴーヤを必死に押さえ込んでいるのは鈴提督と初霜。

それを怯えながらに応援しているのは伊58の提督である茶髪でアイドルのようないケメン面の若い男性、島提督。

そして、そんな修羅場をニコニコと笑いながら見守っているのはセミロングの黒髪を後ろで一つの三編みにし、白露型共通の紺に白のラインの入つたセーラー服を着たどこか儂げな雰囲気を纏う一人の艦娘。

彼女の名前は白露型二番艦 駆逐艦娘‘時雨’。

島提督が保有する艦娘であり、この死闘の原因を作つた張本人でもあり、悪女でもある。

「時雨! お前も笑つてないで手伝え!! というかお前たちのせいでこうなつてんだぞ!」

「僕たちのせい? それは違うよ。僕はただ寂しがつてた島提督と遊んでただけで、偶々

その時に君達が帰つて来ただけだよ。そうだよね、島提督?」

そう言つて島提督に向かつて妖艶に笑う時雨。それを見た島提督はうつとりとした表情で頷いた。端から見ればヒモになつてゐる男にしか見えない。

「ふふふ……島提督、今すぐにその悪女から助け出してやるでち……」

「くう!また力があがつた!ゴーヤさん!貴方本当に潜水艦なの?!」

「今はただの恋する艦娘でち」

「もう……限界……だ!」

技名、愛の嫉妬パワーで筋力が倍以上に膨れ上がつた伊58は二人を振り払い、ゆつくりとした足取りで島提督に近づいていく。

「島提督……どうして……」やは……こんなにも提督の事が好きなんでち……でも、どうして提督は……いつもいつもいつも……その悪女といぢやこらしてゐんのぢ……?」

「ふおおお!ふお、ふおおお!!だ、誰か助けてくれえええ!!」

そんな悲鳴をあげながら伊58の横を走つて逃げようとした島提督。だが、そんな事を伊58が許すはずもなく、目にも止まらない素早い手刀で島提督の意識を刈り取つた。

「ふふふ……島提督はずつと私の物でち……」

右手に酸素魚雷、左手に島提督を掴み、淀んだ空気を撒き散らしながら伊58は部屋を出ていった。

その光景を見た鈴提督と初霜は静かに手を会わせるのであつた。

「さて、今日も面白い物が見れたらし、僕は部屋に戻つてゆつくりしようかな」

「待て、時雨」

小さな欠伸をしながら出ていこうとする時雨の前に立ち塞がる鈴提督と初霜。そんな二人に少し驚きながらも時雨はまた妖艶に笑う。

「あれ？ 鈴提督と初霜ももしかして僕と遊びたいの？ それは楽しみだね。僕も二人と遊んでみたいとずっと思つてたんだ」

そんな時雨の言葉に首を横に振る二人。そして二人揃つて指を指した場所は……居間に置いてある小さな執務机。その机に天高く聳え立つ書類の塔。つまりはそういうことである。

「仕事手伝え♪」

「……それは拒否させてもらうよ」

そうして二度目の死闘が幕を上げた。

## 第4話

「ヒヤツハー、新鮮な深海悽艦だあ!!初霜やつちまえー!!」

「全て……守ります!!」

そう言つて初霜が放つた魚雷は深海悽艦、駆逐口級の横つ腹に見事に当たり、駆逐口級は大きな破裂音を鳴り響かせながら海へと沈んでいった。

二人が民間鎮守府に帰り、そしてとある提督のとある穴が開発されてたから一週間。開発された提督が急遽、病院送りになつてしまい二人は休む暇もなく仕事をこなした。

そのおかげで、今やつている南西の海域に蔓延る深海悽艦の殲滅を最後に天高く聳（そび）え立つていた書類の塔を消すことに成功した。

時雨？彼女は一人と死闘の末、椅子に縛り付けられ延々と書類に判を押す作業をしている。

「ふう、これで全部片付きましたね。さあ帰りましょう!!今すぐに帰りましょう!!!ハ

リーハリーハ！」

「OK初霜！ダッシュで帰つてやるから速く乗りな!!」

改造魚雷挺を操縦している鈴提督は初霜に近づき、おかしなテンションでそう叫ぶ。

そしてまた初霜もおかしなテンションで必死にその魚雷挺へと乗り込む。

どうして二人がおかしくなっているのか？確かに仕事のせいでもあるが、一番の原因ではない。

一番の原因はこの南西の海域の近くに存在する【南西鎮守府】のせいである。

理由は昔、その鎮守府でも一人が男気を魅せてしまったために【南西鎮守府】の艦娘達は提督と初霜ダイスキ状態になつていていたのだ。故に捕まれば貞操の危機。もしかしたら監禁されるかも知れない。そんな恐怖のせいで二人はおかしくなっている。

「あら？ そんなに慌ててどうしたんですの？」

そんな時、突然に一人の後方から凛とした女性の声が海域に響く。その声に反応して二人は急いで振り向く。

二人の視界に映つたのは海上に立つ一人の艦娘。

栗色の髪、ポニーテール、そして特徴的な茶色のブレザーやを着た通称、『神戸生まれのおしゃれな重巡』。纏う雰囲気はお嬢様学校の女学生のよう。

「うふふ、おひさしぶりですわ。初霜さん♪ 鈴提督♪」

柔らかな笑みを浮かべて、南西鎮守府所属の最上型四番艦 重巡洋艦娘‘熊野’は二人に向かつてそう言つた。

「…………初霜おお！」

「はいいい！」

鈴提督が叫ぶ。初霜が応じて改造魚雷挺に乗せてあつた特性の発煙筒を着火、すぐに熊野に向かつて容赦なく投げつける。

「きやあ！」

思わぬ攻撃に怯む熊野。そして異常なまでの煙幕が発煙筒から吹き出し、熊野の視界を妨（さまた）げる。そのスキを逃す二人ではない。

鈴提督が改造魚雷挺のリモコンレバーを操作し、エンジンの回転数を急速に上げる。すると、改造魚雷挺は海面をイルカのように飛び上がつて発進した。

普通はこんな事をしてはいけないというか壊れるのだが、流石改造しているだけあって異常もなくグングンとスピードを上げていく。

「俺のマリンスイーパー号を舐めるなあ!!」

「名前のセンス無さすぎですよ提督!?でも、この速さならついてこれませんね！」

「ふふふ、この改造したマリンスイーパー号の最大速力は約48ノット。島風より速いこいつを捕まえるものなら捕まえてみやがれ！」

そう言いながら鼻を天狗のように伸ばして猛々しく笑う鈴提督。それにつられて笑顔を浮かべる初霜——と熊野。

「…………ん？」

何か多くなかつたか？

取り敢えずエンジンを止めて、鈴提督は魚雷挺に乗つている人物を確認する。

「初霜、俺、熊野の三人だよな？ どこもおかしく……くまのお!?!?」

「はい？ 私（わたくし）がどうかされたんですの？」

最初に見せた柔らかな笑みを浮かべて返事をする熊野。

口から魂が抜けている初霜。

そんな初霜を抱き締めながら隅でガタガタ震える鈴提督。

「ふふ、そんなに怯えられたら私……なんか、もう……いっぱいですわ……」

笑顔の隙間から覗き見える獣のような眼光に、唯一意識を保っていた鈴提督は女性の  
ような悲鳴しかあげられないのであつた。



「——ん？」

「どうしたんだいゴーヤ？もしかして僕を助ける気になつてくれたのかい？」  
「誰が助けるでちか、この悪女。ほらさつさと次の書類に判子を押すでち」  
「酷いな、そう言えば島提督が病院から消えたつて聞いたけど？」

「……島提督なら私の部屋で休んでるんでち……あんな女の巣窟の中に置いておける筈  
がないでち。島提督はゴーヤだけをずっと見てたらいいんでち……ふふふふ……」  
「……早く帰つてこないかな、二人とも」

## 第5話

結局、あの状態から逃げだせる事が出来なかつた鈴提督と初霜は熊野の外装に乗せられ、改造魚雷挺は外装に牽引される形で二人と一隻は仲良く【南西鎮守府】へと連れて行かれるはめになつた。

ちなみに外装と言うのは艦装の艦船形態の事を指す。深海淵艦相手には只のカカシ状態になるのだが、こういつた輸送目的の為に備え付けられた機能である。第一話に、伊58と共に現れた潜水艦もこの外装である。

「あゝ、しあわせですわゝゝゝ」

「きやー!! 頬擦りしないでくださいー!!」

そして現在、大きな応接室のような場所に放り込まれた二人は熊野の魔の手に晒されていた。まあ、実質的な被害は全て初霜が受けているのだが。

「て、提督！ 鈴提督！ た、助けてください!!」

「耐える！ 耐えるんだ初霜！ あと少しでこの扉が開きそう……な気がする！」

「開くわけ無いじゃないですか！ 外装ですよ！ 熊野さんの許可が無い限り無理ですよ!!」

「ああ、分かつてる！分かつてること、抗（あらが）いたいんだよ俺はああ！！」

「ふふふふ、そんなに開けて欲しいのなら開けてあげましょか？」

「マジで！」

「但し、初霜さんとニヤンニヤンさせてくださいまし」

「はあ！熊野さん、頭大丈夫ひやん！む、胸を揉まないで……！」

「……初霜、きっと迎えに行くから頑張れ！」

「ふえつ！」

「その言葉を待つていましたわ！」

鈴提督の言葉を聞くや否や、熊野は初霜を担ぎ上げものすごいスピードと滑らかに動きで応接室を出ていった。

その時、初霜がなにやら裏切者やら鬼提督やらとキヤーキヤー騒いでいたが、鈴提督は爽やかな笑顔で敬礼し見送った。

「さて……逃げるか」

残された鈴提督は開けっぱなしになつた扉から悠々自適に出ていった。さらば初霜。彼女という尊き犠牲は鈴提督の心の中に永遠？に残るだろう。

◆◆◆◆◆◆◆

「だ、騙された……」

右往左往しながらなんとか上甲板へとたどり着いた鈴提督はその場に崩れ落ちた。実は鈴提督も嫌な予感はしていたのだ。

いくら熊野が初霜にぞつこんだと言つても自分を逃がすような状況を作り出す筈がない。もし、そういう状況を作り出すとしたら、それは逃げられる心配が無いということ。

もつと言えば、船内のなかにそこまで波に揺られる感覚が無かつた。それに機関音も殆どしなかつた。つまりは何処かに停泊している可能性が高いということ。

「な、なんとか外に出られた……」

崩れ落ちた鈴提督の後ろ、船内へと続く扉が重々しく開かれ、そこから先程妖怪熊野にお持ち帰りされた初霜が現れた。その姿はまるで激しい戦場を二、三度行き来して、なんとか帰ってきた兵士のようだつたと後に鈴提督は語る。

「あつ、提督……さつきはよくも…………嘘…………」

初霜はゾンビのような足取りで鈴提督に近づくも、周りの景色を見て同じように崩れ落ちた。

二人の視界に映るのは

大きなクレーンが設置された立派な工廠（こうしきう）。  
湾岸に駐留している多くの補給船。

茶色のつなぎを着た工員と楽しそうに話す艦娘と思われる少女達。

止めに巨大な屋敷のような建物に打ち付けられた巨大な看板に書かれた【南西鎮守府】の文字。

「ようこそ、【南西鎮守府】へ♪」

二人の後ろからお洒落な重巡の声がしたが、二人の耳に入つて来なかつたのは言うまでもない。

## 第6話

——その部屋は暗かつた。

いや、物理的という訳ではない。ちゃんと電灯もあるし、一介の将校と艦娘に与えられる部屋では無いぐらいに気品に溢れ豪華であつた。

だが、部屋は暗かつた。

「ふふふ……もう逃げられない……ふふふ……」

「戦艦怖い空母怖い提督怖い戦艦怖い空母怖い提督怖い——」

暗さの原因はその部屋の椅子に腰掛け呪いのような言葉を何度も呟いている一組の海軍将校と艦娘、つまり鈴提督と初霜のせいである。

熊野に拉致されこの南西鎮守府に着いた二人は最後の抵抗とばかりに暴れたが、【南西鎮守府】から増援にきた多数の艦娘達相手ではどうにもならなかつた。

ロープでミノムシ状態にされた二人は丁寧にこの部屋へと運び込まれた。  
そして去り際に彼女達はこう言つた。

明日が本番ですので、と。

何が本番なのか?とは聞かなかつた。二人は分かつていた。明日が狂宴(様々な意味

での）だと。

それから二人はすつとこの状態である。

「戦艦怖い空母怖い提督怖い……ふう、落ち着いた。さて逃げる方々を考えるか」しかし、このまま何もせずに明日のメインディッシュになつてたまるものか！と鈴提督は奮起した。

「ふふふ……なに言つてるんですか提督、もう私達は逃げられないんです……このままこの鎮守府の艦娘達の捌け口に使われるんですよ……ふふふふふ」

見るも無惨に心が折られている初霜を余所に鈴提督は椅子から立ち上がり、ぐるぐると部屋の中を調べ始める。

あるのは大の大人四人が寝られる程の巨大なベッド。調べたが逃走に使えそうな物はなかつた。次は如何にも職人が端正籠めて作つたような色々な家具。こちらもやはり無かつた。

そして窓には重厚な鉄格子と幾重にも巻かれた有刺鉄線。有刺鉄線は使えそうだなと思つたが、工具が無ければ解体出来ない。

入ってきたの木製の扉に近づき耳を当てる。聞こえてくるのは楽しそうな幼い少女達の声。廊下を歩いている足音が聴こえないで、どうも入り口に陣取つているらしい。数は三人。

それらを全て確認した鈴提督は椅子にまた腰掛け——

「……戦艦怖い空母怖い提督怖い——」

——また呪詛を呟き始めた。どうやら逃走経路が一切浮かんでこなかつたらしい。

初霜はそんな鈴提督から視線を外して窓の外を見る。

鉄格子と有刺鉄線の隙間から覗かせる綺麗な夕暮れ。それをじつと眺めながら初霜は「民間鎮守府」の皆に願つた。

救援求む、と。



場所は変わつて「民間鎮守府」。その居間では時雨と伊58が、霧のおかげで幻想的な美しさを放つ夕日を肴にお茶を飲んでいた。

「遅いね、二人とも」

「途中で拉致られたのに羊羹一つ賭けるでち」

「拉致? 二人を拉致るような鎮守府なんて今日の仕事場の近くにあつたつけ?」

「甘いでちよ時雨。近くにあろうが無からうが奴等は追つてくるでちから」

「へえ、そうなんだ。ちなみに奴等つて前の【北東鎮守府】以外にあるの?」

「ゴーヤが知つてるのは、北東、南西、北部の三つでち。まあ、北部はそこまで危なくないでちが、北東と南西は捕まつたらさよならでち」

「北東は分かるけど、南西は何処か危ないんだい? 確かあそこは航空戦艦や航空巡洋艦が主力の鎮守府だがら、あの一人ならすぐにでも逃げ出せそうな気がするけど?」

「南西は頭がいい奴が多いでち。それに執着心が半端ないでち。前に助けに行つた時はしつこく追つてきて、ゴーヤも冷や汗ものだつたんでち」

「君がそこまで追い詰められるとは相当だね……」

「本当もう勘弁でち……さて定期連絡も来ないし、行くでちか」

「ああ、そうだね。寝てる島提督はどうする?」

「本当はゴーヤがずっと看病しておきたいけど、今回だけはあるの忌まわしい看護婦たちにお願いするでち」

「ふふ、了解。じゃあ連絡しておくよ……遺書書いておく?」

「ふざけるなでち」

軽口を叩き終わると湯飲みをおき、立ち上がる二人。そして各自の艦装を取りに部屋へと戻る。

そんな二人の背中を後押しするように夕日は輝いていた。

## 第7話

マルヒトマルマル。つまりは午前一時。

只今絶賛軟禁中の二人、初霜と鈴提督は息を押し殺して仲良くベットの中に潜り込んだ。勿論、変な事をしているわけではない。ただじーつと機会を待っていただけだ。

「……初霜、お前は動くなよ」

「了解です……」

ぼそぼそと小声で鈴提督は命令する。

そしてゆっくりとベッドから下り、慎重に扉に近づき耳を当てる。

無音。それについさつきまで会った複数の人らしき気配もない。

これはもしかしたら？と思いつき、鈴提督はドアノブを音がならないようにこれまた慎重に回す。だが扉は開かない。押しても引いても開かない。

「……まあ、そうだろうな……」

きっと外から南京錠のようなもので、開けなくしているのだろうと理解し人知れずに落ち込む。

「ていとくー……どうですかー?……」

ベットの上にいる初霜は消え入りそな声で鈴提督に訊ねる。鈴提督は軍で身につけた匍匐（ほふく）前進を用いてベッドに戻ると、初霜に扉が開かない事と扉の前には誰もいない事を説明する。

「……ですか……意外と徹底していますね、こゝ)……」

「……きっと一度逃がしたから、マニュアルでも作つてシミュレーションしてたんじやないか?……」

「……こなら有り得ますね。それで、どうやつてこから逃げるんですか?……」

「……俺は“TT作戦”を実行する……」

鈴提督の“TT作戦”という言葉に反応して目に涙を潤ませる初霜。

この反応は“TT作戦”が実は大変危険な作戦で、もしかしたら鈴提督が死んでしまうかもしれないからという不安と悲哀から起きたものではない。

ただ単にこの“TT作戦”、正式名称“ちよつとトイレ作戦”では鈴提督一人しか逃げれる保障がないのだ。

つまり何時ものように自分が囮なのですね、分かりたくないけど分かりますという绝望と悲哀から起きたものである。

「……まあまあ、そんなに泣くな初霜。お前にもちゃんと作戦は考えてある……」

「本当むがつ！」

「……声が大きい……」

とつさに初霜の口を塞いだ鈴提督はすぐに辺りの様子を伺う。

扇、問題なし。窓、問題なし。壁、問題なし。天井、ネズミが動く音のみ問題なし。家具一式、問題なし。ベットの下、いつのまにか置いてあつた十八禁健全本（相手は艦娘、それも航空戦艦と航空巡洋艦のオンパレード。中々にレア）が複数あるが問題なし。

「……ふう、大丈夫そうだな。それじや説明するぞ。その名も „KT作戦“ だ……」

「……け、 „KT作戦“ ですか……」

鈴提督は一度、うむと頷いて作戦の概要を事細かく初霜に説明していくのであつた——



——次の日の朝、マルハチヒトマル。つまりは午前八時十分。

二人がいる部屋にノックの音が響き一人の小さな艦娘が朝食の乗つたカートを押して入つて來た。

その艦娘の名前は、‘阜月’。

膝まである長い癖つ毛のような金髪を後ろで二つに纏めた睦月型五番艦の駆逐艦娘である。そして貴重なボクつ娘もある。

いつもは黒いセーラー服を着ているのだが、今日は非番なのだろうか無地の白Tシャツと青いショートパンツを着ていた。

「おはよう二人とも。今日はボクお手製のサンドイッチと、飲み物は日向さんおすすめのお茶を持つてきたよ♪」

ソファーに座つて読書をしていた二人にニコニコ笑顔でそう言うと、カートに乗せていた朝食を机の上に置いていく。

「おつ、上手そうだな。ありがとう、皐月」

「えへへ、今日は特に上手く出来たんだ♪」

「そりやあ楽しみだ。でもその前に、ちよつとトイレ行つていいか?」

「トイレ? 部屋に備えつけのあるでしょ?」

「それがどうも水が流れなくてな。壊れちまつたらしい」

「それは大変だね。分かった、後で提督に報告して業者を呼んでおくように頼んでみる」「すまん。あつ、それと……ちよつと皐月に頼みたい事があるんだが……」

「ボクに?」

頭に疑問符を浮かべる皐月に近づき鈴提督は初霜を指差す。

「……あれ見てどう思う？」

「どうつて……」

鈴提督にそう訊ねられた皐月は酷く困ってしまう。なぜなら初霜の元気が見るからにはないからだ。

持つてている本は一ページも捲らずただ開いているだけ。髪も整えていない、服も寝るときに使つた可愛らしい熊の絵が描かれたパジャマのまま。そんな彼女がどんな表情をしているかも俯いているのと、その長い髪が顔全体を隠していて分からぬ。「……なんか幽霊みたい……」

「だろ？なんかさ、起きてからずつとあんな調子でな。どうしたんだ？と聞いても何も話さないからちよつと心配なんだわ。だから皐月。ちよつと相手してくんないか？」

「えっ!? ボクが！」

「もしかしたら俺には言えない事でああなつてるかも知れんしな。それに同じ駆逐艦娘なら話しやすいだろ？」

「で、でも……ボク……初霜とはそんなに仲良い方じやないし……」

「大丈夫だつて、それに此を気に仲良くなれば良いんだよ。んじや、頼んだわ」  
ほとんど一方的にそう頼み込むと、鈴提督はそそくさと部屋から出ていった。  
「ど、どうしよう……」

皐月は困つてしまつた。

皐月は初霜スキーの軍団の一人であるが、初霜とはそんなに話した事がない。それは皐月だけではなく、この鎮守府の他の駆逐艦娘達にも言える事である。この【南西鎮守府】に存在する皐月を含む駆逐艦娘達には軽巡、重巡、戦艦、空母の艦娘達のような積極性が無い。

相手が好きだからといつて自分の気持ちを表に出せず、隠したままそつと影から見守り、相手が気づいてくれるまで待つ。それが【南西鎮守府】の駆逐艦娘達の恋愛観である。

なので、初霜と同じ部屋にいる。それに邪魔をするような艦娘もいない。部屋は防音という明らかにチヤンスな状態なのに、皐月は困つてしまう。

「皐月さん……」

おろおろと困つている皐月に、初霜は精気の無い声で彼女の名前を呼ぶ。

皐月は反応しておそるおそる初霜の側に近寄り腰を屈めて、どうしたの？と返答した。すると――

「ふえっ！」

――皐月は床に押し倒された。

理解が追いつかずにパニックになつて固まつてゐる皐月。そして、その上に馬乗りに

なつて いる 初霜 は 固まつて いる 彼女 を 見下ろし、 パジャマ を 着崩しながら こう 言つた。

—— 露月さん、 私を 抱いて ください、 と。

こうして “K T作戦” 、 正式名称 “駆逐艦ちよろい作戦” が 決行された。

## 第8話

失敗した。失敗した。失敗した。

【南西鎮守府】の執務室のトイレの中。どこかのタイムトラベラーのような言葉を脳内で繰り返し唱えている肌の色が少しばかし黒い青年。そう鈴提督である。さて、鈴提督が何を失敗したのか紐解いていこう。

あれは約三十分前のこと。

意気揚々と初霜と皐月を置いて部屋から出た鈴提督は取り合えず近くを歩いていた青髪のロングヘアで独特なデザインのセーラー服？を着た駆逐艦娘、五月雨、に事情を話し、トイレの場所を案内してもらつた。

そして案内された場所が何故かここ。執務室であつた。

どうして執務室？という疑問を訊ねる暇も与えずに、後ろから五月雨に押されて中に入つた鈴提督を待つていたのは——変態だつた。

【南西鎮守府】の提督とその秘書艦である二人の戦艦娘。その変態三人衆が目に狂喜を宿し、涎を垂らして待つていた。

鈴提督はその三人を見た瞬間、トイレ借ります！と言つて急いでトイレに籠つた。

そして今に至る。

「おーい、鈴ちゃん？ お腹大丈夫ー？ 入ってから結構な時間たつてるけどー？」

ドアの向こう側からまだ幼さが残る女性の不安そうな声が鈴提督の耳に入つてくる。

この声の持ち主こそこの【南西鎮守府】のトップで提督の董（すみれ）提督である。年齢は二十歳。

だが変態三人衆である。

黒い髪を後ろに一つに括つた爽やかスポーツ少女というような容姿を持ち、老若男の提督達に人気の若き提督もある。

だが変態三人衆の筆頭である。

「初めて会つた時はこんな子じやないと思つてたのに……」

「んー？ どうしたのー？ やっぱり調子悪いのー？ なら私お手製の浣腸を入れーー

「大丈夫！ 大丈夫だから！ すぐに出るから！ 調子も良いから！ 快調だから！」

—— そうなのー？ ならもうすぐ出るよねー？ 待つてからー♪

そう言い残してドアの前の董提督の気配が徐々に遠ざかっていく。

鈴提督はホッと一息をつき、そしてこの籠城戦の終わりがすぐそこまで迫つている事に気付く。

「どうしようと……」

両手で顔を隠して絶望の声を絞り出す。

変態三人衆はどれもが手練れぞろいである。

筆頭の董提督はあらゆる武術に精通し足も速い。

秘書艦である二人の戦艦娘、伊勢、と、日向、はまず人ではない。故に一人ともに身体能力は化け物である。

最早、逃げは不可能に近い。

「……なら、諦めるか？」

あり得ない、と鈴提督は自分自身に答える。

「だよな。なら、やることは一つだけだ」

ニヤリと不適に笑い、鈴提督は足元から右の壁を二、三回強めに蹴る。すると壁の一部が壊れ掌より少し大きい茶色い袋が姿を見せた。

それを手に取り中身を見た鈴提督の顔は笑顔ではあったがどこか狂気を孕んでいた。そう、例えるなら死地に向かう船に押し込まれ頭がおかしくなつて笑う新参兵のように。

「逃げるのが無理なら……戦うしかないよなあ！」

強気には言うがその声は震えていた。そして“TT作戦改”が幕を上げようとして

いた。



一方その頃、初霜はとても困っていた。その原因は彼女が押し倒している皐月である。

「あ、あの……優しくしてください……」

目を瞑り覚悟を決めたのか、スッと両手を広げる皐月。その姿はとても愛くるしい。同姓でそつちの趣味が無い初霜もドキドキしてしまう程だ。

だが！だがしかし、それを初霜は望んでいなかつた。

初霜は鈴提督からここまで大胆にすれば、相手はきっと気絶すると言われたから羞恥の心を押し殺してここまでした。

なのに、今の現状では……何か取り返しのつかない所まで来ているのでは無いのか？  
と疑問を抱くしかなかい。

(……あれ？ ちょっと待つて “K.T作戦” のKって……)

駆逐艦を意味する。

(皐月さんは駆逐艦娘……それと私も駆逐艦娘……はつ!?)

初霜は気づいた。気づいてしまった。

“KT作戦”とは自分を納得させて凹に使う偽の作戦だという事を。